

2015年度には、本学音楽学部・音楽研究科に過去の演奏記録がどのように残され保存されているかの調査を行い、その結果を受けてその中でも緊急性の高いアナログオープンリールテープ演奏記録のデジタル化作業を16年度に続けて行った。

現在、本学音楽学部・音楽研究科にはアナログオープンリール録音資料が約600本存在することが15年度の調査で判明しているが、その中でも古いものは1963年（昭和38年）のものであり、劣化が相当進んでいる可能性がある（実際すでに再生不能のものもあった）、できるだけ早い対策が必要であると考え、当面は資料整理や目録の作成には踏み込まずデジタル化作業のみを行うこととした。

約600本のアナログオープンリール録音資料の中で、重要性の高い定期演奏会、卒業演奏会、特別演奏会の記録約350本から順にデジタル化し保存する予定である。当面データのデジタル化を優先し、公開可能な音源ライブラリーや目録の作成などの整備はデジタル化が終了してから取り組むこととしている。

今年度作業が完了したのは2月10日現在で計105本（16年度と合わせて212本）であり、その内最も古いものは昭和52年1月21日の第37回定期演奏会で京都会館第2ホールにおいて開催されたもの、最も新しいものは昭和58年1月20日京都会館第2ホールでの第55回定期演奏会の録音である。ちなみにこの回の定期演奏会はモーツァルトのオペラ「コジ・ファン・トゥッテ」を取り上げている。現在の進捗状況から推察すれば、最も重要な録音については次年度でデジタル化を終えることができそうだ。

昨年度、今年度、さらに来年度と3年はかかるであろうこのプロジェクトは、非常によいタイミングで取り組めたと考えている。

実際に作業を開始してみるとすでに経年変化で再生不可能になったものも若干あったが、ぎりぎりのタイミングでほとんどのテープを無事再生できている。もう少し遅れていれば状態は急速に悪化していただろう。また、アナログ時代をよく知る奥野哲也氏というよき技術者の協力を得られたのも幸運であったと言える。奥野氏は筆者と同じ世代でアナログ録音が最も輝いていた最後の時代に技術者としてのキャリアを開始し、アナログからデジタルへの録音技術やメディアの変遷の時代を生きてきた貴重な人物である。今や若い世代の技術者の多くはアナログ録音メディアを扱ったことがないであろう時代である。氏の持っているノウハウは非常に貴重である。

アナログ録音メディアの再生は、再生技術の良し悪しによってその結果が大きく異なるという点でデジタルメディアの再生と非常に異なっている。一本一本のテープの状態を見極め、最良の再生方法を考えながら個別対応で作業しなければならない。また、再生機器の整備もデジタル機器にはないノウハウが必要である。例をあげると、再生ヘッドの清掃には経験によってのみ得られる微妙なノウハウが求められる。綿棒を使うのか超微細繊維クロスを使うのか等、ヘッドやキャプスタン、テープガイドの状態に応じて臨機応変に対応しなければならない。また、経年変化によるテープ磁性体の剥離や汚れにどう対応するか、アルコールを使うのか乾拭きなのかの見極めも非常にむづかしい。不適切な処理をすればそれでテープが再生不能になったりする。また、巻ムラによるテープの伸び等の変形にどう対応するのもアナログ時代の豊富な経験がなければ判断がむづかしい。再生中にテープが切れた場合はつなぐ必要があるし、それにはテープとはさみで編集をしていた時代の技術と経験が必要だ。それに第一、オープンリールテープデッキはすでに製造されなくなって久しいのだ。今ある機器が寿命を迎えればそれで終わりである。

移転を数年後に控えた今、このプロジェクトを行い得ていることの意義は大きいと言えるだろう。